

# プラ製ストロー 逆風こそ商機

海洋汚染を防ぐためだとして、マクドナルドやガストなどの外食大手が、相次いでプラスチック製ストローの使用中止を表明している。そのストロー製造で国内の半分のシェアを持つのが、岡山県浅口市のシバセ工業だ。社員50人の会社への影響は――。

## 国内シェア半分 岡山のシバセ工業

## 医療に転用◆小口客重視

浅口市は、もともと小麦が特産だった。麦の茎を使ったストローが明治期につくられ、日本のストロー産業発祥の地とされる。

シバセ工業は1969年に事業を始めた。樹脂原料を高

温で溶かし、管状にして伸ばす。水にくぐらせると冷えて

固まる。機械で均等な長さに切る。1秒あたり5〜10本の

ペースで出来上がる。直径3

・5ミリから1センチを超す太いものまで。機械が素材を押し出

す速度を調節することで、直

径や肉厚を変える。形も折り

曲げられる蛇腹付きなど、2

00種類以上の商品がある。

「プラ製品の存在が悪いの

ではなく、問題は廃棄の仕方

にあるのに」。製造から廃棄にいたるまでの過程できちんと管理ができていれば、汚染にはつながらないはず。磯田拓也社長(58)は、急にわき上がった「ストロー廃止運動」に疑問を投げかける。

ただ、すぐに影響が出るわけではなさそうだ。もともと

大手外食チェーンへの納入はほとんど無い。実は、国内で流通するストローの9割は中国

や韓国製など輸入品。大手外食チェーンで使われるのは、

こうした海外製とみられる。

シバセは、まちの喫茶店など、小口の客を大事にしている。70〜80年代、シバセはグ

リコ乳業(現江崎グリコ)の紙パック飲料用のストローをつくって急成長した。ピーク時には、売上高の95%がグリ

コ向けになった。

ところが90年代、ライバル会社が伸縮型ストローの生産を強化すると、切り替えられ

てしまった。6億円あった売上高は、1億円近くまで落ち

込んだ。

立て直しのため、取引先開拓を進めたのが、モーター大手の日本電産の技術者から転

じた磯田社長だ。98年に入社。現在では、5社しかなかった取引先を約900社に増

やし、売上高は4億円まで戻した。

磯田社長は次の手も打っていた。例えば、医療用に転用

すること。注射針のカバーや血液分析装置に使う吸引用の

管などに、簡単に加工できるのだという。

昨年、約1億円を投じ、医療工業用ストロー用のクリーン

ルームを整備した。いまは売上高は6千万円ほどだが、3億〜4億円まで、数年で引き上げられると感じている。



シバセ工業の工場。樹脂の粒を溶かして管状に伸ばし、水で冷やして固める=10月10日、岡山県浅口市

シバセ工業は、ストロー製造に乗り出す前、そうめんをつくる会社だった。「新規事業を毎年10%ずつ成長させ、売上高10億円を目指す」。磯田社長は、ストロー廃止という逆風を、「第3の創業」への原動力にしようと考えている。

(伊藤弘毅)